

岡山大学アドミッションセンター・筑波大学教育学（国際教育）修士プログラム
岡山理科大学グローバル教育センター共催
国際バカロレアフォーラム
国際バカロレアと既存の教育との整合性—IB 教育は脅威ではない—

◆日時 平成28年7月11日（月） 13:00～16:00
◆場所 岡山大学 中央図書館3階 セミナー室 A・B・C

プログラム

12:30～ 受付

13:00～ 開会の挨拶 岡山大学副学長（入試改革担当） 田原 誠

講演

■国際バカロレア高校の現状と筑波大学修士課程における IB 教員養成

筑波大学 客員教授 キャロル・犬飼・ディクソン

■国際バカロレア教育と既存の教育との理論的整合性

筑波大学 人間系教育学域 准教授 佐藤 博志

14:10～ 休憩

14:20～ 講演

■岡山理科大学の IB 教員養成課程—学部での取り組みと高校への還元—

岡山理科大学 IB 教員養成プロジェクト準備室長 眞砂 和典

■IB 数学：高校での実践例

関西学院千里国際高等部数学科 教諭 馬場 博史

■IB 教育要素を含んだ大学授業実践例 1：地域実践型授業

岡山大学 地域総合研究センター 准教授 前田 芳男

■IB 教育要素を含んだ大学授業実践例 2：英語模擬国連授業

岡山大学 基幹教育センター 外国語教育部門 講師 トーマス・ファスト

15:40～ パネルディスカッション

モデレーター 岡山大学副学長（入試改革担当） 田原 誠

パネリスト 筑波大学 客員教授 キャロル・犬飼・ディクソン

筑波大学 人間系教育学域 准教授 佐藤 博志

岡山理科大学 IB 教員養成プロジェクト準備室長 眞砂 和典

関西学院千里国際高等部数学科 教諭 馬場 博史

岡山大学 地域総合研究センター 准教授 前田 芳男

岡山大学 基幹教育センター 外国語教育部門 講師 トーマス・ファスト

15:55～ 閉会の挨拶 岡山大学副学長（入試改革担当） 田原 誠

16:00～ 館長室で交流会（17:00閉会）

三大学共催 IB フォーラムの報告

「国際バカロレアと既存の教育との整合性—IB 教育は脅威ではない」

[フォーラム開催の背景と概要]

2016年7月11日(月)、岡山大学中央図書館において、国際バカロレアフォーラムが開催された。このフォーラムは、岡山大学アドミッションセンター、筑波大学教育学(国際教育)修士プログラム、岡山理科大学グローバル教育センターの共催で、国際バカロレア普及のためのAP(大学教育加速再生プログラム採択)事業のひとつであった。共催三大学(及び関係校)から各2名の発表者が「国際バカロレアと既存の教育との整合性—IB 教育は脅威ではない」をテーマに、理論と実践の両面から、高校で実践されているIBの教科教育、IB教員の養成、IB教育の要素を含んだ大学での実践など、IB教育と日本に既存の教育との整合性が検証された。発表者6名、参加者94名。3時間の講演とディスカッションに続き、その後の1時間の交流会では、IB教育に現在関わっている関係者に加えて、IB教育に関心を持っている人たちが集い、情報交換をし、ネットワークを構築した。ネットワーク構築は、このフォーラムのひとつの大きい狙いでもあった。

日本の教育改革にとって、今や国際バカロレア教育は、重要な指針を与えるものと認識されている。IB認定校が増えつつあり、IB教員養成プログラムは学部レベルでも大学院レベルでもいくつかの大学で提供されてきているが、未だIB教育の実態は十分に知られていない。そしてIBへの拒否反応もある事実は否めない。このような状況の中、日本の教育関係機関・関係者は争っている場合ではなく、知識・知恵・情報をシェアしあって力を合わせ、全体としてIB教育を広め高めていく必要がある。

このフォーラムを企画するにあたり、以下の4つの意義・目的を設定した。

1. 国際バカロレア教育に関する岡山大学・筑波大学・岡山理科大学の交流をはじめ、参加校との交流を図る。
2. 国際バカロレア教育に関する高校と大学との接続を図る。
3. 国際バカロレア教育は、日本の従来教育に比べて異質のものではなく、既にある日本の高校・大学の教育活動と基盤は共通していることを理論と実践の両面から検証する。
4. 国際バカロレア教育と日本の現存の教育に共通する素晴らしい基盤(倫理教育、課外活動、多角的な視点、検証的思考、能動的学びなど)を拡大・浸透させていく方法を探る。

[発表要旨]

各発表者の要旨を簡単にまとめると以下のようになる。

1. 「国際バカロレア高校の現状と筑波大学修士課程におけるIB教員養成」

(筑波大学 客員教授 キャロル・犬飼・ディクソン)

犬飼先生は、日本とイギリスの両国でIB業務に携わり、IB発足当時からの変遷を間近で見られてきた。IB校については、TOKを教えることにより学力が向上した横浜インターナショナルスクール(YIS)の例を話された。YISでは最初、英語母語話者の生徒だけがIBを履修しており、日本人生徒は英語が

できないので IB をとるのは無理だと思われていた。しかし思考と言語は密接に関係していると信じていた犬飼先生は、英語がネイティブではない生徒たちにも IB の DP 課程を通じてクリティカル・シンキングを教え、その結果、英語も上達して自身がつき、学習モチベーションが上がって他の科目の成績もよくなるという効果が見られた。IB の基盤となっているクリティカル・シンキングにより学校文化や雰囲気が激変したという例である。

次に、筑波大学の IB 教員養成コースについての説明がなされた。筑波大学の IB 教員育成コースは、来年 4 月開設に向けて取り組んでいる。MA in International Education の下に位置するもので、定員は 10 名。DP, MYP, PYP を対象にしており、オンラインのオプションも計画している。課程は、新たに IB 教員養成用に準備する 11 科目と修士論文からなる。科目履修は 1 年間、論文作成は 1 年間で行い、修了者には IB educator certificate (IBEC) が授与される。

単に、IB 校で科目を教えるためだけであれば、IBO が主催する教員用の科目別ワークショップ（カテゴリー 1 から 3）を履修すればよいが、筑波大学の IBEC のコースでは、IB の理念、IB 教育の考え方などを広く学び、将来、コーディネーターなど、IB 校での運営・管理にも携わることができる人材の育成を目指している。また、このコースは国際教養修士課程の一部なので、IB 教員にならない教員もいるかもしれない。それでも IB のリーダーを養成したいからと、IB の教育哲学などを非 IB 校で実践して欲しいからとであると犬飼先生は言われる。

犬飼先生は、一般的に IB 教育は、世界のトップクラスの大学への進学などから、特別に優秀な生徒を育てるエリートプログラムと捉えられている（IBO はそのような面を表に出して宣伝している）が、通常の高校と変わらない生徒も多数いるとも付け加えられた。IB 教育の理念は、日本が長年培ってきた教育によくなじむ点が多くあり、IB 教育の長所を取り入れて日本の教育を改革することは難しくはないと考えると犬飼先生は結ばれた。

2. 「国際バカロレア教育と既存の教育との理論的整合性」

（筑波大学 人間系教育学域 准教授 佐藤博志）

筑波大学の IB 教員養成コースの理論部門担当の佐藤先生からは、文科省の教育への取り組みと学力の変遷、IB がどのように関わるのかについて、詳しい説明がなされた。最後に「明日の教育のために 5 つの提言」が示されたが、その中の 2 つを下記、引用する。

提言 4：各大学はフルディプロマを適切に評価するだけでなく、IB のサーティフィケート（科目証明書）による学びの履歴を、大学入試で、AO、推薦、前期後期日程で加点する等、高く評価し、大学の一般教養科目単位として認定する必要がある。日本の状況では、サーティフィケートはかなり重要であり、IBO の理解も必要。

提言 5：日本人が陥りがちな「論理よりムード」「二分法」「極論」（例、なんとなく IB は嫌、サーティフィケートよりフルディプロマが偉い、MYP より DP がずっと優れている、これからは知識よりも批判力、等の粗雑で単純な思考）からの離脱が必要。「非生産的言説」を克服するために、私達一人ひとりが「研究的思考」を軸にする。

IB 認定校・候補校が増え、教育導入が進められている現在、実際の教育現場で何が起きているのかの調査と研究が急務であるとの示唆がなされた。

3. 「岡山理科大学の IB 教員養成課程—学部での取り組みと高校への還元—」

(岡山理科大学 IB 教員養成プロジェクト準備室長 眞砂和典)

岡山理科大学グローバル教育センターが提供する IB 教員養成コースについて、眞砂先生から説明がなされた。これは IB Educator Certificate (IBEC) が取得できるコースであり、理大の 5 つの学部学生が副専攻として取れるばかりではなく、大学院生と現役教員も科目等履修生として履修が可能である。理大ならではの特徴を活かして数学と科学に特化した実践授業「DP 数学」「DP 科学」に加え、「国際バカロレア概論」「IB 教育課程論」「IB 教育方法論」「IB 教育評価論」「DP 教育実践研究 I, II」が提供される。中でも「国際バカロレア概論」は教養教育科目として広く導入されており、今年度から 14 名の履修生がいる。

養成課程を終了した IB 教員に期待することは、主に 2 つ。IB 校でリーダーになり新たな可能性を模索することと、非 IB 校 (5000 以上ある一般の高校や中学) で教育改革を断行することである。IB 教員は学び続け、改善をもたらし、生後のモデルとなるべき存在であることを期待されている。

眞砂先生からは、これからの日本の教育改革のためには、IB のフル・ディプロマプログラムではなく、サーティフィケート・プログラムを活用していくことも提案された。

4. 「IB 数学:高校での実践例」

(関西学院千里国際高等部(SIS) 数学科教諭 馬場博史)

関西学院千里国際中等部高等部(SIS)と IB 認定校の関西学院大阪インターナショナルスクール(OIS) は同じキャンパス内に併設されており、互いにそれぞれの教育内容を参考にできるというユニークな環境にある。SIS の馬場先生は、1993 年から一般の数学授業で時々 IB Math を紹介し、2007 年からは日本語で IB Math の教科書を使って数学の授業を行っている。「国際バカロレアの数学：世界標準の高校数学とは」の著者でもある馬場先生は、日本の数学と IB Math との整合性などについて、大きな違いは応用問題にあり、IB Math では、基本的知識や技能を応用した総合的問題や、自然現象や社会現象などを扱った実用的な問題が多数あると指摘された。日本の数学と基本はほとんど共通しているが、設問の仕方など IB から学ぶことがあるとの提言であった。

5. 「IB 教育要素を含んだ大学授業実践例 1：地域実践型授業」

(岡山大学 地域総合研究センター 准教授 前田芳男)

岡山大学では、実践力をもった人材育成を目指しているが、その一環として、いくつかの地域実践型授業が提供されている。前田先生の「フィールド調査の基礎を学ぶ 2016」授業の目標は、文系理系を問わず、データ収集やその分析・活用法など、卒業研究や社会に出た際に有用な能力を修得することである。自ら課題を見つけ、協働し、探求していく学習態度は、IB 学習者像を反映しており、大学でも IB 教育要素を含んだ授業が行われているという実践例の 1 つが示された。

6. 「IB 教育要素を含んだ大学授業実践例 2：英語模擬国連授業」

(岡山大学 基幹教育センター 外国語教育部門 講師 トーマス・ファスト)

MUN (Model United Nations) は、学生たちが各国代表として世界・地球レベルの課題について討論・協議するという、国連を模した活動である。世界各国で MUN が開催されており、授業の一環として活発に行っている高校もある。

ファスト先生の英語模擬国連授業は、今年度から上級英語科目の一つとして提供されているクラスで、岡山大学学部生と留学生がほぼ半々の 18 名が履修している。MUN は、IB では CAS に正式に認められる活動であり、多様性を尊重し、「人が持つ違いを違いとして理解し、自分と異なる考えの人々にもそれぞれの正しさがあり得ると認めることができる人」を目指している IB 教育の理念を具現化している。ファスト先生によると、履修学生の学習意欲は極めて高く、教室外でも学び合う learning community が形成されているという。

[まとめ]

6名の発表終了後、それぞれの発表者からの短いコメントと田原先生の総括コメントがあった。

「IB 教育は日本にはまだ目新しくとっつきにくいものだと思われるが、実は、既存の教育と整合性があり、異色のものではない。これから日本に IB 教育の理念を普及させていくためには、教育機関・関係者の協働的な働きが重要であり、高校と 3つの大学が集まり、知見を共有し合った今回のフォーラムは、その第一歩である」という主旨であった。

当フォーラムを企画するにあたり設定した前述の 4つの意義と目的は、ほぼ達成されたと言えるであろう。